

学生宿舎における近隣騒音の実状

山崎 あづみ*・滝山 桂子**・佐藤 洋美***

(平成17年4月26日受付；平成17年6月13日受理)

要 旨

上越教育大学学生宿舎は、大学敷地内の一角に設置されており、学部生の半数以上が入居している。現状では、かなりの入居者が、近隣騒音に悩まされている。そこで、本研究は、入居者の近隣騒音に関する意識を、加害意識と被害意識の視座から検討することにより、学生宿舎における近隣騒音の実態を明らかにすることを目的とした。

2001年7月から8月に、近隣騒音に関する22項目の質問からなるアンケート調査をした。調査対象は、上越教育大学に在籍し、単身用学生宿舎に入居している学部生とし、男女合計192名であった。データを、単純集計・クロス集計・t検定を用いて分析した。

その結果、調査対象者の大多数が、近隣騒音による被害意識・加害意識のどちらも保有していることが明らかになった。近隣騒音が問題を招く主な原因は、建物の不十分な遮音性能、他人への配慮の欠如、生活時間帯の多様化であった。また、近隣騒音に関する対策として、遮音構造の改善と、新しいモラルの確立が挙げられた。よって、近隣騒音は、物理的要因と心理的要因の双方に関わる問題であることが示された。

KEY WORDS

student dormitory	学生宿舎	vicinity noise	近隣騒音
assailant consciousness	加害意識	victim consciousness	被害意識
physical factor	物理的要因	psychological factor	心理的要因

1. 研究目的

近隣騒音とは、住戸を含め近隣の居住地区内での日常生活に伴って必然的に発生する雑多な騒音のこと⁽¹⁾を指す。近隣騒音問題を解決するには、その特性上、単に音の大きさのみで論議し法律で規制したり、騒音防止技術を開発したりするなどの物理的対策だけでは解決せず、心理的対策が重要になってくる。

大学敷地内に設置された上越教育大学学生宿舎は、学部生の半数以上が入居しており、近隣騒音に悩まされている入居者が存在している現状がある。実際、苦情が寄せられ、2001年8月には騒音問題に関する大学側の基本方針が打ち出された。先行研究では、一戸建て住宅より集

* JA ながの

** 生活・健康系教育講座

*** 生活・健康系コース（院生）

合住宅においてより深刻になる傾向にあること、その解決のためには居住者の住まい方の工夫や近隣への気配りが効果的であることが明らかにされた⁽²⁾。また、大学生を対象とした近隣騒音問題の意識調査はなされてきた⁽¹⁾が、大学の学生寮、殊に上越教育大学の学生宿舎に限定して近隣騒音の実態を明らかにしたものはみあたらない。そこで、本研究では、学生宿舎入居者の近隣騒音についての意識を、加害意識と被害意識の視座に基づいて分析することにより、学生宿舎における近隣騒音の実態を把握することを目的とした。

2. 方 法

2-1 調査対象・方法・時期

調査対象は、平成13年7月1日現在、上越教育大学学生宿舎単身棟（以下「学生宿舎という」）に入居している学部生482名である。このうち、回収数は203名、有効回答は192名（男子49名、女子143名）であった。調査方法は質問紙法で、平成13年7月11日から8月31日の期間で実施した。

また、本研究の調査対象とした学生宿舎は、学生に良好な勉学・研鑽の場を提供するとともに、自立的な共同生活を通じて自主性のある人間形成を図ることを目的としている。大学キャンパスと学生宿舎がある山屋敷地区は、上杉謙信居城の春日山山麓から南東方向の平野部に横たわる緩やかな丘陵地であり、周辺は緑豊かな住宅地と田畑が広がっている。信越本線の最寄りの春日山駅から西南に約1km、高田駅から北西に約3km、直江津駅から南西に約4kmの距離に位置している。

学生宿舎には、2001年7月現在、在籍する学部生約720名のうち482名が入居しており、学部生の半数以上が入居している。その内訳は、男性166名（34.4%）、女性316名（65.6%）である。そして、居住形態は、1年次はI型（2人部屋）であり、2年次からはII型（1人部屋）である。II型は、居室棟が学年ごとに分かれておらず、2、3、4年次が混じりあって生活している。有効回答192名中I型入居者は61名、II型入居者は131名である。学生宿舎は5階建て鉄筋コンクリート造であり、建築基準法による建築物の用途上の「寄宿舎」に分類され、「3階以上の病院・診療所・ホテル・旅館・下宿・共同住宅・寄宿舎・児童福祉施設など」の部類に入る。居室の壁厚は150mm～200mm、床および天井は145mmであり、さらに床にはビニールタイルを敷き、天井には吸音・断熱材料である、ひる石が吹き付けてある。また、各居室の扉は、軽量スチールドアである。なお、II型は、I型の居室を間仕切りで仕切ったものである。また、日本建築学会により遮音性能基準が定められており、学生宿舎の遮音性能は、集合住宅の居室3級と同等程度に設計されている。

2-2 調査内容・分析の方法

調査内容は、①フェイスシート、②騒音による被害意識、③騒音による加害意識、④学生宿舎の近隣騒音が問題になる背景に関する、全22項目からなる。①では、性別・学年・居住棟および階数・交友関係・隣近所との付き合いの程度・騒音源となりやすい品物9つの所有状況、②では、被害経験の有無・被害意識の程度・騒音発生源に対する対処法について、③では、加害意識の有無・加害意識の程度・実際に苦情を受けた経験の有無およびその対処法について、④では、学生宿舎における近隣騒音問題の原因および対策として適切と思われること、につい

て回答を求めた。集計は、調査対象者全員について、各項目ならびに属性別の単純集計、主要項目間のクロス集計を行った。被害意識と加害意識の程度についての分析は、男女差および居住形態差を見るために、t検定を行った。また、部分的に難波ほか(1978)⁽²⁾および中村(1987)⁽¹⁾の研究との比較を行った。

3. 結果と考察

3-1 騒音による被害意識

3-1-1 近隣騒音被害意識の有無

近隣騒音による被害経験者は174名であり、全体の91.1%(N, A1を除く)であった。先行研究⁽¹⁾の調査(52.9%)と比較してかなり高かった。性別で見ると、男子(93.5%)は女子(90.1%)よりもやや高かった。居住形態別では、Ⅱ型(2, 3, 4年生 1人部屋)(93.1%)はⅠ型(1年生 2人部屋)(86.9%)より高かった。性別・居住形態別の組み合わせの中で、被害経験者の最も少ないのは、Ⅰ型女子(84.4%)であった。この理由として、1年生は学生宿舎に入学してから日も浅く、他学年に比べて被害を受けた機会が少ないことが考えられる。また、1年生は他学年と違い、同じ棟に居住しているのが同学年のみであり、2人部屋でもあるため、隣近所との付き合いの程度の高いことから、これも被害経験が少ないことに関係しているのではないかと考える。

3-1-2 騒音発生場所別の被害意識の程度

騒音が気になったことが「ある」と回答した者174名に対して、騒音の発生場所として、「自分以外の居室」「居住者全体の共用の場」などの5つの場所を挙げ、それぞれの場所から聞こえてくる音がどの程度気になるか5段階の評定尺度法(中位値3.0)で評価を求めた。5項目それぞれの被害意識程度の平均値と標準偏差を表1に示した。平均値で見ると、「居住者全体の共用の場」が一番多く、次いで「自分以外の居室」であった。

表1 騒音の発生場所別
被害意識程度の平均値・標準偏差

	平均値	標準偏差
自分以外の居室	3.60	1.14
全体の共用の場	3.84	1.09
各棟の共用の場	2.55	1.16
廊下・階段	3.14	1.26
屋外	2.86	1.27

また、表2には、騒音の発生場所として挙げた5つの項目それぞれについて、評定尺度別の人数(N)と、その割合(%)を示した。

騒音の発生場所の5項目について、男女差および居住形態差があるかを知るために、t検定を行った(表3)。表より、男女間で有意差(p<0.01)

表2 騒音の発生場所別 被害意識の程度

	とても気になる		少し気になる		どちらともいえない		あまり気にならない		全く気にならない	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
自分以外の居室	32	18.4	89	51.1	16	9.2	26	14.9	11	6.3
全体の共用の場	51	29.3	79	45.4	16	9.2	22	12.6	6	3.4
棟ごとの共用の場	12	6.9	29	16.8	31	17.9	71	41.0	30	17.3
廊下・階段	24	13.8	60	34.5	25	14.4	46	26.4	19	10.9
屋外	13	7.5	58	33.5	23	13.3	49	28.3	30	17.3

がみられたのは、「居住者全体の共用の場」で、女子は男子より被害意識が高かった。居住形態による有意差（ $p < 0.01$ ）がみられたのは「屋外」で、I型はII

型より被害意識が有意に高いという結果であった。

3-1-3 騒音源別の被害意識の程度

騒音源として、「テレビ・ラジオ・ステレオの音」「目覚まし時計・電話の鳴る音」「人の声」などの9つの音を挙げ、それぞれの音がどの程度気になるかを5段階の評定尺度法（中位値3.0）で評価を求めた。騒音源として挙げた9項目それぞれの平均値と標準偏差を、表4に示した。平均値で見ると、「人の声」が一番多かった。

また、表5には、騒音源として挙げた9項目それぞれについて、各段階に回答した人数（N）と、その割合を記した。なお、

騒音源の種類は、環境用語辞典⁽²⁾、難波ほか⁽³⁾、中村⁽¹⁾を参考にして項目立てをし、決定した。

表3 騒音の発生場所別 被害意識の男女間
居住形態間における t 検定

	性別		t 検定	居住形態		t 検定
	男子	女子		I型	II型	
自分以外の居室	3.85	> 3.52		3.36	< 3.71	
居住者全体の共用の場	3.20	< 4.08	**	3.94	> 3.80	
棟ごとの共用の場	2.33	< 2.63		2.70	> 2.48	
廊下・階段	3.00	< 3.19		3.34	> 3.05	
屋外	3.13	> 2.76		3.62	> 2.52	**

表4 騒音源別 被害意識の平均値・標準偏差

	平均値	標準偏差
テレビ等の音	2.51	1.20
楽器の演奏音	2.73	1.35
目覚まし時計等の音	3.05	1.26
人の声	4.20	0.93
給排水の音	2.12	1.07
移動音等	2.80	1.17
開閉音	3.06	1.25
足音	3.09	1.27
車の音	2.71	1.23

表5 騒音源別 被害意識の程度

	とても気になる		少し気になる		どちらともいえない		あまり気にならない		全く気にならない	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
テレビ等の音	11	6.4	34	19.7	23	13.3	69	39.9	36	20.8
楽器の演奏音	19	11.0	42	24.3	26	15.0	46	26.6	40	23.1
目覚まし時計等の音	21	12.1	58	33.5	23	13.3	51	29.5	20	11.6
人の声	76	43.9	72	41.6	12	6.9	10	5.8	3	1.7
給排水の音	3	1.7	23	13.4	22	12.8	67	39.0	57	33.1
移動音等	10	5.8	49	28.3	35	20.2	54	31.2	25	14.5
開閉音	21	12.1	55	31.8	32	18.5	43	24.9	22	12.7
足音	24	14.0	53	31.0	29	17.0	45	26.3	20	11.7
車の音	13	7.5	45	26.0	23	13.3	63	36.4	29	16.8

騒音源として挙げた9項目の各項目について、男女差および居住形態差を見るために、t検定を行った。表6は、それぞれの平均値を比較し、t検定の結果を示したものである。

表6 騒音源別 被害意識の男女間居住形態間における t 検定

	性別		t 検定	居住形態			
	男子	女子		I 型	II 型	t 検定	
テレビ・ラジオ・ステレオの音	2.65	>	2.46	1.87	<	2.79	**
楽器の演奏音	3.00	>	2.64	1.92	<	3.08	**
目覚し時計・電話の鳴る音	3.04	<	3.06	2.69	<	3.21	*
人の声	4.20	=	4.20	4.17	<	4.21	
給排水の音	1.84	<	2.23	2.31	>	2.03	
移動音・落下音・物音	2.61	<	2.87	2.71	<	2.83	
開閉音	2.83	<	3.14	3.37	<	2.93	*
足音	2.59	<	3.28	3.25	>	3.03	
車の音	3.00	>	2.61	3.21	>	2.50	**

** . 危険率 1 % 未満

* . 危険率 5 % 未満

男女間で有意差がみられたのは、「給排水音」「足音」の 2 項目であった。「給排水音」は $p < 0.05$ で有意差があり、男子より女子の方が被害意識が高かった。「足音」は、 $p < 0.01$ で有意差があり、これも男子より女子の方が被害意識が高かった。居住形態による有意差がみられたのは、「テレビ・ラジオ・ステレオの音」「楽器の演奏音」「目覚まし時計・電話の鳴る音」「開閉音」「車の音」の 5 項目であった。「テレビ・ラジオ・ステレオの音」、「楽器の演奏音」は $p < 0.01$ で有意差があり、I 型より II 型の方が被害意識が高かった。「目覚まし時計・電話の鳴る音」は $p < 0.05$ で有意差があり、これも I 型より II 型の方が被害意識が高かった。「開閉音」は $p < 0.05$ で有意差があり、II 型より I 型の方が被害意識が高かった。「車の音」は $p < 0.01$ で有意差があり、II 型より I 型の方が被害意識が高かった。男子より女子が、I 型より II 型が、被害意識が高いことが明らかになった。また、男女差より居住形態差の方が多くの項目で有意差がみられた。

3-1-4 騒音が気になる時間帯

騒音が気になる時間帯として、「深夜・早朝」「主に昼間」「主に夜間」「一日中」「特定できない」の 5 つを挙げ、その中から最も気になる時間帯について単一回答を求めた。その結果、「主に夜間」および「深夜・早朝」の合計が 85% であった。この理由として、調査対象者が昼間あまり学生宿舎にいないこと、静かな時間帯には騒音が特に気になることが考えられた。アンケート用紙の末尾に設けた自由記述欄には、52 名が記述していたが、そのうち 27 名が夜間・深夜・早朝の騒音について言及していた。特に、深夜に及ぶ共用棟・談話室などでの騒ぎ声については、19 名が記述していた。また、「一日中」と長時間にわたる被害意識を表した者も 5 名おり、すべてが II 型入居者であった。

3-1-5 騒音が気になる状況

騒音が気になる状況として、「勉強しているとき」「考え事をしているとき」「テレビ・音楽などを視聴しているとき」などの 11 の項目を挙げ、複数回答を求めた。その結果を図 1 に示した。「寝ようとしているとき」が 147 名と最も多く、また、「寝ているとき」と回答した者も 62 名いた。学生宿舎の近隣騒音が、睡眠を妨げている実態が明らかになった。先行研究⁽²⁾の全国規模調査でも、睡眠妨害が最も多いことが指摘されていた。2 番目に多かったのが、「勉強をしているとき」(115 名)であった。また、先行研究⁽¹⁾の調査でも騒音による被害の内容として、

「読書・勉強・考え事のじゃまになる」と回答した者が37.8%を占め、最も多かった。また、自由記述欄でも、“テスト期間中は特に騒音が気になる”，“教員採用試験受験生対策として、II型でも学年別で住み分けをする”などと記述している者がいた。以上のことから、騒音により勉強が妨げられると感じている者が多いことが把握された。因みに不快項目として、先行研究⁽³⁾の調査でも、病気の時・気分が悪いときのようなケースにおいて出現頻度が比較的高かった。また、特に集合住宅において、考え事をしているとき・ぼんやりしたいときに騒音に悩まされる場合が多いことも指摘されていた。本調査も類似した傾向がうかがわれた。

難波ほか(1978)⁽²⁾、中村(1987)⁽¹⁾を参考にして、騒音が気になる状況を5つの項目に分類し、図2に示した。「勉強しているとき」「読書をしているとき」「考え事をしているとき」「何もしていないとき」を①私的項目、「寝ようとしているとき」「寝ているとき」を②睡眠項目、「気分が沈んでいるとき」「病気の時」を③不快項目、「テレビ・音楽などを視聴しているとき」「友人などと話しているとき」を④娯楽項目、「気分がいいとき」を⑤快項目とし、各項目の平均値を算出した。②睡眠項目(40.0%)が最も高く、①私的項目、③不快項目においても騒音が気になることを把握できた。

3-1-6 苦情を申し入れた経験の有無

苦情を申し入れたことが「ある」と回答した者は23名で、全体の13%であった。女性(7.1%)より男性(30.4%)の方が、またI型入居者(7.5%)よりII型入居者(15.8%)の方が、苦情を申し入れた経験が「ある」と回答した者の割合が多かった。しかし、被害経験者の約9割は、苦情を申し入れた経験がなく、騒音による被害意識があっても直接行動にできる者はかなり少ないことが判明した。

3-1-7 苦情を申し入れた方法と結果

苦情を申し入れた方法について図3に示した。意思を伝えた方法として、「相手に直接苦情を言った」「それとなく騒音で困っていることを何らかの手段で相手に伝え、相手の注意を促した」など4つの手段を挙げ、単一回答を求めた。「直接言った」が圧倒的に多く、苦情を申し入れたことのある者全体の53.6%を占めていた。「相手の注意を促した」「他の人を通じて注

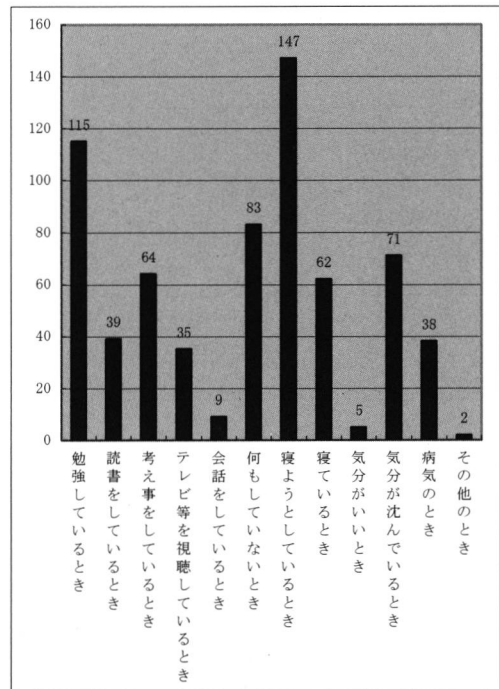


図1 騒音が気になる状況(複数回答)

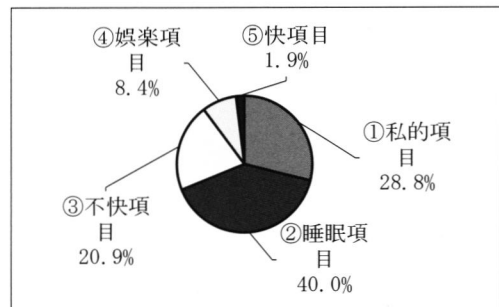


図2 5つの項目別
騒音が気になる状況

意」の婉曲的な方法をとった者は35.8%であり、直接行動にでる者の方が多かった。難波ほか(1978)⁽²⁾の幅広い年齢層を対象とした調査では、婉曲的方法をとる者の方がはるかに多かった。大学生を対象とした中村(1987)⁽¹⁾の調査では本調査と同様に、直接行動に出るものが多く、この結果を若者らしさではないかと指摘していた。なお、「相手の部屋に投書した」と回答した者は1名もおらず、「その他」の回答は、「口実を作った」、「音を出し返した」、「携帯電話のメールで申し入れた」と記述していた。

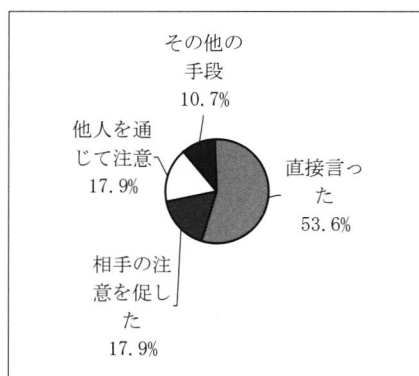


図3 苦情を申し入れた方法

苦情を申し入れたあとの状態について、「静かになった」「変わらない」「うるさくなった」「わからない」の4つを挙げ、単一回答を求めた。図4より、苦情を申し入れた結果、「静かになった」と回答した者が13名(56.5%)と最も多く、苦情を言われた者のほとんどは素直に非を認め、何らかの対処をしたと考えられた。しかし、「変わらない」「うるさくなった」と回答した者(17.3%)もあり、さらに、「その他」には、「仲が悪くなった」、「多少静かになった」、「一時期静かになっただけ」との記述があった。苦情を申し入れても効果がなかったり、人間関係が悪化したりするケースも把握できた。苦情を申し入れることの難しい一面も見られた。

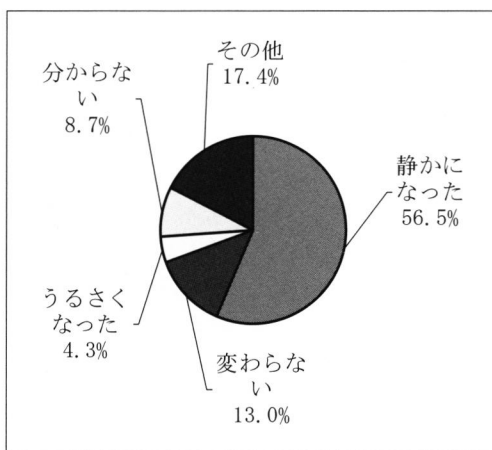


図4 苦情を申し入れた結果

3-1-8 苦情を申し入れなかった理由

苦情を申し入れたことが「ない」と回答した者168名に対して、特に苦情を申し入れなかった理由について、「我慢しようと思えばできるから」「苦情や注意をするほどたいしたことではなかったから」「お互い様だから」など6つの項目を挙げ、単一回答を求めた。図5にその結果を示した。147名から回答があり、そのうち、中村(1987)⁽¹⁾の調査では3位(15%程度)にとどまっていた「お互い様」と回答した者が47名(32.0%)と最も多くを占めた。一方、「人間関係が悪くなると困るから」と近所づきあいの配慮をしている者や、「聞き入れてもらえそうにない」と諦め、悲観的に

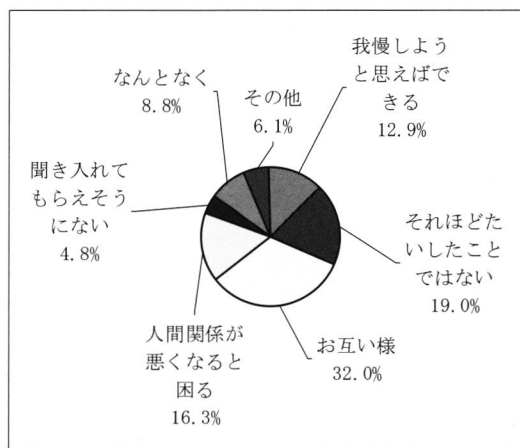


図5 苦情を申し入れなかった理由

なっている者は、合わせると21.1%であった。中村(1987)¹⁾の調査(40.8%)と比較すると低かった。この結果は、学生宿舎での仲間意識がある程度形成されているように思われた。また、「我慢しようと思えばできる」と「それほどたいしたことではない」を合わせると31.9%であり、このように回答した者は騒音に対して比較的楽観的であると考えられる。「その他」の回答は、「申し入れるのが怖い」、「すごく言いたかったが我慢した」、「上の学年の人なのでためらわれる」などの行動を抑制する記述であった。

3-2 騒音による加害意識

3-2-1 近隣騒音加害意識の有無

近隣騒音による加害意識の有無について189名からの回答があり、そのうち153名(81.0%, N.A3を除く)が「ある」と答えた。女子(82.9%)は男子(75.5%)より、またII型入居者(88.4%)はI型入居者(65.0%)より加害意識が高かった。男女間における加害意識の傾向が、被害意識の傾向と少し食い違っていた。被害意識においては、男子は女子より被害意識が高かった。

3-2-2 騒音源別の加害意識の程度

迷惑をかけているのではないかと気にしている音が「ある」と回答した者153名に対し、気にしている音の種類(騒音源)として、「テレビ・ラジオ・ステレオの音」「楽器の演奏音(ギターなど)」「目覚まし時計・電話の鳴る音」「人の声(話し声、騒ぎ声、歌声など)」など9つの音を挙げ、それぞれの音を出していることをどの程度気にしているかを、5段階の評定尺度法(中位値3.0)で評価回答を求めた。その結果、騒音源として挙げた9項目の、それぞれの加害意識程度の平均値と標準偏差を表7に示した。また、表8には、騒音源として挙げた9項目について、各段階に回答数(N)とその割合を示した。

表7 騒音源別 加害意識の平均値、標準偏差

	平均値	標準偏差
テレビ・ステレオ・ラジオの音	3.53	1.27
楽器の演奏音	2.19	1.43
目覚まし時計・電話の鳴る音	2.95	1.37
人の声	3.88	1.06
給排水の音	2.16	1.16
移動音・落下音・物音	2.70	1.25
開閉音	3.13	1.35
足音	2.51	1.24
車の音	1.80	1.09

表8 騒音源別 加害意識の程度

	とても気にする		少し気にする		どちらともいえない		あまり気にしない		全く気にしない	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
テレビ・ステレオ・ラジオの音	31	20.7	73	48.7	7	4.7	23	15.3	16	10.7
楽器の演奏音	15	10.3	16	11.0	27	18.5	12	8.2	76	52.1
目覚まし時計・電話鳴る音	20	13.2	47	31.1	20	13.2	34	22.5	30	19.9
人の声	43	28.5	74	49.0	13	8.6	15	9.9	6	4.0
給排水の音	5	3.4	20	13.5	23	15.5	46	31.1	54	36.5
移動音・落下音・物音	10	6.8	38	25.7	29	19.6	39	26.4	32	21.6
開閉音	23	15.4	53	35.6	19	12.8	29	19.5	25	16.8
足音	9	6.0	31	20.8	25	16.8	46	30.9	38	25.5
車の音	5	3.4	7	4.7	25	16.9	27	18.2	84	56.8

平均値でみると、「人の声」が最も加害意識が強く、次いで「テレビ・ラジオ・ステレオの音」「開閉音」が続く。騒音源として挙げた9項目ひとつひとつについて、加害意識の男女差および居住形態による差を比較するためにt検定を行い、表9に示した。男女間で有意差（ $p < 0.01$ ）がみられたのは、「給排水の音」「移動音・落下音・物音」「足音」の3項目であり、すべてにおいて男子より女子の方が加害意識が高かった。居住形態による有意差（ $p < 0.01$ ）がみられたのは、「テレビ・ラジオ・ステレオの音」「開閉音」の2項目であった。「テレビ・ラジオ・ステレオの音」はI型よりII型の方が加害意識が高く、「開閉音」は逆にII型よりI型の方が加害意識が高かった。

3-2-3 苦情を受けた経験の有無

表9 騒音源別 加害意識の男女および居住形態間におけるt検定

	性別		t検定	居住形態		t検定		
	男子	女子		I型	II型			
テレビ・ラジオ・ステレオの音	3.44	<	3.56	2.86	>	3.75	**	
楽器の演奏音	2.44	>	2.12	1.89	<	2.29		
目覚し時計・電話の鳴る音	2.69	<	3.03	2.84	<	2.99		
人の声	3.78	<	3.91	3.68	<	3.95		
給排水の音	1.49	<	2.37	**	2.19	>	2.15	
移動音・落下音・物音	2.11	<	2.88	**	2.67	<	2.71	
開閉音	2.89	<	3.21		3.84	<	2.89	**
足音	1.94	<	2.68	**	2.73	>	2.47	
車の音	1.92	>	1.76		1.63	<	1.85	

** . 危険率1%未満

実際に苦情を受けたことが「ある」と回答した者は24名（13%）であった。女子（10.5%）より男子（18.4%）の方が苦情を受けたことが「ある」と回答した者が多い傾向であった。また、学年間の差はあまりないが、1年男子は苦情を受けたことが「ある」と回答した者の割合が31.2%と特に高かった。さらに、苦情を受けた音の種類（騒音源）として、「テレビ・ラジオ・ステレオの音」「楽器の演奏音」「人の声」「給排水の音」「開閉音」「足音」「車の音」の7つの音を挙げ、その中からすべて選んで回答してもらった。また、「その他」として自由記述欄も設けた。「人の声」について苦情を言われた者が最も多く、次いで「テレビ・ラジオ・ステレオ音」「足音」が10%以上を占めていた。なお、「楽器の演奏音」「車の音」について苦情を言われた者は1人もいなかった。その他の回答は「落下音」「ゲームの音」であった。

3-2-4 苦情を受けたあとの対処方法

苦情に対してどう対処したかを、「相手に謝った」「静かにするようにした」など5つの項目を挙げ、その中から単一回答を求めた。「相手に謝った」（35.7%）「静かにするようにした」（35.7%）の2項目が最も多く、次いで「使い方を工夫したり大きな音（声）を出したりしないよう心がけた」（25.0%）であった。苦情を受けた者ほぼ全員が素直に自分の非を認め、改善の努力を把握できた。しかし、この結果は、被害経験者が苦情を申し入れた結果（図4）と比較するとやや違った傾向を示した。なお、「防音の工夫をした」と答えた者は1人もいなかった。

3-3 騒音による被害意識と加害意識の関連

被害意識のある者は、回答者全体の91.1%であり(3-1-1)、加害意識のある者は81.0%であった(3-2-1)。そこで、この2つをクロス集計(表10)し、被害意識と加害意識の関連性をみるために検討した。

表10 騒音の被害意識と加害意識の有無の関係

		迷惑をかけているのではないかと 気にしている音はあるか		合計
		ある	ない	
騒音が気になったことがあるか	ある	143	31	174
	ない	9	5	14
合計		152	36	188

3-3-1 平均点の相関図(散布図)からみる相関関係

被害意識と加害意識の程度 of 平均値を使用して、被害意識と加害意識の相関図を作成し、全体的な傾向について検討し、結果を図6に示した。特に際立つのが、「人の声」「テレビ・ラジオ・ステレオの音」「給排水の音」である。「人の声」は、他の騒音源と比較して、被害意識・加害意識ともに高いことを把握できた。「テレビ・ステレオ・ラジオの音」は、加害意識がかなり高いわりに被害意識はそれほど高くなかった。自分が心配しているほど他人は気にかけていないと理解された。「給排水の音」は、他の騒音源と比較すると、被害意識・加害意識ともに低かった。

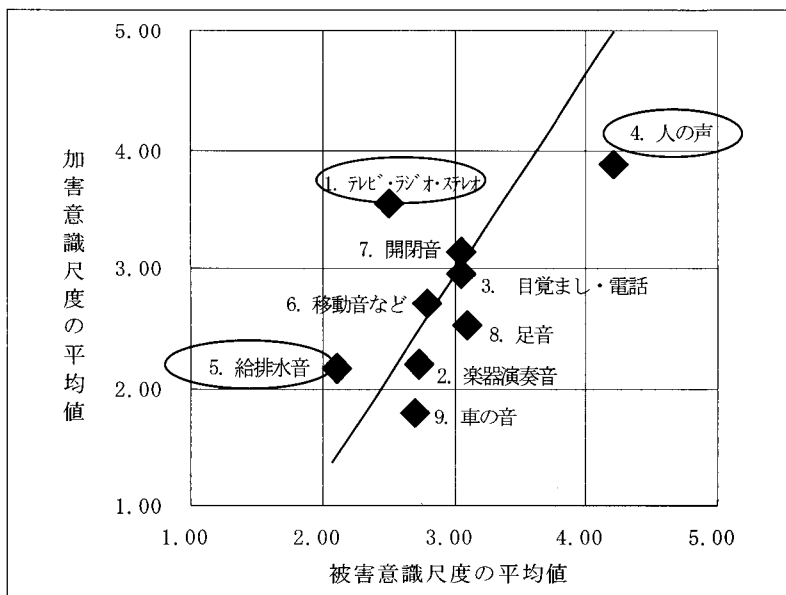


図6 被害意識程度および加害意識程度の平均点の相関図(散布図)

3-4 学生宿舎の近隣騒音問題が問題になる背景

3-4-1 学生宿舎の近隣騒音問題の原因

騒音の原因として、「自分の出す音は気にならないが、他人の出す音は気になるという自分勝手の傾向が強いから」「他人に迷惑をかけないという心がけが欠けているから」「壁が薄いなど、遮音構造がしっかりしていないから」など8つの項目を挙げ、その中から複数回答を求めた。結果は図7に示すとおりである。回答数の平均をみたところ、平均回答数は3.0個であった。また、男女で比較したところ、男子が3.2個であり女子が3.0個であった。さらに、I型入

居者が2.5個なのに対して、Ⅱ型入居者は3.3個であった。回答数の男女差はあまり見られないが、居住形態差があると考えられた。結果を見ると、「遮音構造がしっかりしていない」(22.5%)が最も多く、次いで、「他人に迷惑をかけないという心が欠けている」(19.1%)、「生活時間帯の変化」(17.7%)が挙げられた。最も多かった、「遮音構造がしっかりしていない」について、居住形態別で比較したところ、Ⅰ型入居者は25名(Ⅰ型入居者の41.0%)が指摘しただけであるが、Ⅱ型入居者は106名(Ⅱ型入居者の80.9%)が指摘していた。このことから、Ⅱ型の間仕切りが薄いと感じている者が多いと考えられた。

また、回答を居住形態別に分けて集計し、それぞれについて上位5つを挙げたところ、表11に示すような結果となった。Ⅱ型入居者は遮音構造を1位に挙げているのに対して、Ⅰ型入居者は4位であった。ここからも、2, 3, 4年生がⅡ型居室の間仕切りの遮音構造に不満を持っていることが明らかになった。「その他」の記述内容は、“寛容性の問題であり、度合いによる”“自分中心の生活時間”“自分がうるさいと気づいていない”などであった。

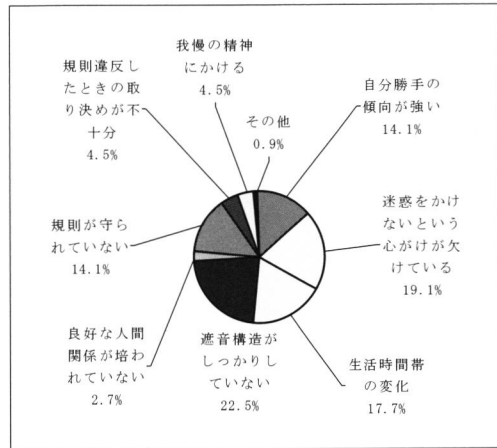


図7 近隣騒音問題の背景

表11 近隣騒音が問題になる原因の順位(居住形態別)

順位	Ⅰ型入居者(1年生)	順位	Ⅱ型入居者(2, 3, 4年生)
1	生活時間帯の変化	1	遮音構造がしっかりしていない
2	迷惑をかけないという心がけが欠けている	2	迷惑をかけないという心がけが欠けている
3	規則が守られていない	3	生活時間帯の変化
4	遮音構造がしっかりしていない	4	自分勝手の傾向が強い
5	自分勝手の傾向が強い	5	規則が守られていない

3-4-2 学生宿舎の近隣騒音問題に対する対策

学生宿舎の近隣騒音問題に関して考えられる対策として、「学生宿舎の規則で取り締まる」「遮音構造のしっかりした建物にする」「騒音に対する新しいモラルを確立し、普及させる」など5つの項目を挙げ、複数回答を求めた。結果を、図8に示したが、平均回答数は1.6個であり男女による違いはなかった。さらに、Ⅰ型入居者が1.5個なのに対してⅡ型入居者は1.7個であった。この質問の回答個数については、男女や居住形態ではあまり差がないと理解された。結果をみると、「遮音構造のしっかりとした建物にする」(33.1%)が一番高く、次いで、

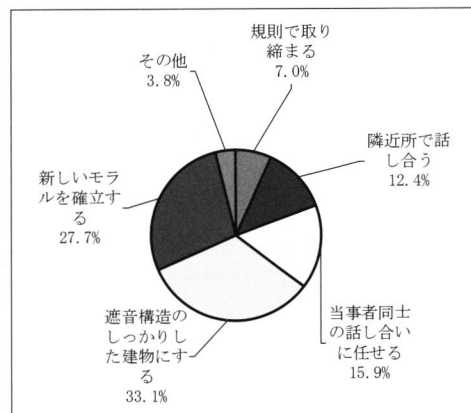


図8 近隣騒音問題に対する対策

「新しいモラルを確立する」(28.0%)であった。また、「話し合い」に解決を見る者はあわせて28.3%であった。しかし、「規則で取り締まる」は7.0%にとどまった。

表12は、近隣騒音に対する対策について、居住形態

別に集計し順位をつけたものである。ここでもII型入居者は、「遮音構造のしっかりした建物にする」を1位に挙げており、これらの結果から、物理的要因である建物の構造の改善と、心理的要因である新しいモラルの確立の両方に解決策があると思う者が多いことが明らかになった。「その他」の対策としては、“各自が時間と場所を考えた行動をする”“啓発のパンフレットや張り紙をする”“毎日のことではないので大丈夫”“我慢しあう”“遠慮せず騒音を出している部屋の人に忠告する”“気にしないようにする”など多様な問題解決の方法に言及していた。

表12 近隣騒音に対する対策の回答率と順位(居住形態別)

	I型入居者		II型入居者	
	%	順位	%	順位
規則で取り締まる	8.2	5	13.0	5
隣近所で話し合う	19.7	4	20.6	4
当事者同士の話し合いに任せる	27.9	3	25.2	3
遮音構造のしっかりした建物にする	36.1	2	62.6	1
新しいモラルを確立する	47.5	1	44.3	2
その他の対策	6.6	6	6.1	6

4. 今後の課題

上越教育大学単身用学生宿舎は、学生に良好な勉学・研鑽の場を提供するとともに、自立的な共同生活を通じて自主性のある人間形成を図ることを目的としている。この目的を知っている者は、入居者の中で何人いるかは定かではない。本研究において、近隣騒音問題は、物理的要因と心理的要因があることが明らかになった。しかし、物理的要因に関連した遮音構造の改善は困難である。そこで、少しでも近隣騒音問題を緩和するために、心理的要因について改善することが当面の課題と考えられる。本研究でも隣近所との付き合いがある者ほど被害意識が小さいことが把握された。隣近所と付き合うことは、共同生活を円滑にすることに他ならない。つまり、学生宿舎の目的のひとつである自立的な共同生活が実現できれば、本学の学生宿舎における近隣騒音問題は緩和されることが示唆された。したがって、入居者はこの学生宿舎の目的を知り、近隣騒音の対策について入居者同士で合意形成をする必要がある。また、学校側は、それらの機会を保証する役割が求められる。

参考文献

- (1) 中村敏枝 1987「近隣騒音問題に関する調査—最近5年間の大阪大学学生の場合—」大阪大学教養部研究集録 36, 1-13
- (2) 難波精一郎・桑野園子・中村敏枝・加藤徹 1978「近隣騒音問題に関するアンケート調査」日本音響学会誌 34(10), 592-599
- (3) 荒木峻・沼田眞・和田攻編 1985「環境科学辞典」東京化学同人 199-470

The Actual Circumstances of the Vicinity Noise at the Student Dormitory

Adumi YAMAZAKI*, Keiko TAKIYAMA**, Hiromi SATO***

ABSTRACT

The student dormitory of the Joetsu University of Education is placed in the corner of the university campus, and more than half of the numbers of students live there. In the present state of affairs, no small occupants have been annoyed by the vicinity noise. The aim of the research was to clarify the actual circumstances of the vicinity noise in the student dormitory by investigating the occupants' consciousness on the vicinity noise on view-points of both assailant and victim consciousness.

The questionnaire survey consisted of 22 question items concerning the vicinity noise was conducted during July-August, 2001. The subjects were 192 students, male and female, who were registered in the Joetsu University of Education, and lived in a single dormitory. The data were analyzed using simple and crossing totals and the t-test.

The most of the subjects had both assailant and victim consciousness towards the vicinity noise. The main cause that the vicinity noise creates problems due to insufficient soundproof construction of building, lack of consideration to others, and diversification of living time zone. As provision against the vicinity noise, the improvement of soundproof construction and the establishment of new morality were proposed. It was shown that the vicinity noise was a problem related to both the physical factor and psychological factors.

* J.A. Nagano

** Division of Physical Education, Home Economics and Technology Education : Department of Home Education

*** Graduate student (Niigata Pref. Public School Teacher)